
義妹は姫君剣者ッ！

初音カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義妹は姫君剣者ッ！

【Nコード】

N2507X

【作者名】

初音カノン

【あらすじ】

義妹は清楚で可愛い超美少女ッ！！無差別に皆を虜にする彼女、
神岡琴音、は異世界の剣士だった…。

俺が東京の町をブラブラしてた時に偶然にも義妹を見かけてしまったせいで俺までもが巻き込まれてしまうー。

主人公は気が付くと魔法少女に変身していてッ（少女って所に注目！）

少女だからなッ？俺男だし。無理矢理：

：俺が魔法少女に転生した時の姿は、妹以上に可愛いらしい：

魔法少女（正体ロリコンスケベ）と剣士（美少女義妹）のお話。
話も設定も適当です。勝手に小説名変えました。すみません…、

？（？） 天使が舞い降りる

ムサイ男子校から帰宅する俺は家に帰るのを急行していた。

やっと…やっと今日の疲れと、男のムサイ臭いが全部癒される！！

俺の中の、俺の為の、俺だけの所謂俺の天国で天使が待機している家へ。

俺の脳内はそれだけだった。

「只今……。」

可能な限り冷静に呼び掛け、そして天使を待機するのだ。そこで数を数える。いち…に…

『さん！』

「お帰りい〜！」

俺の中で叫んだ声と天使の声はハモリ、良いハーモニーを紡ぎ出す。

ロリ系な服の天使は俺の前に姿を現した。エンジェル

彼女の名は、神岡琴音（14歳）中学生。序に童顔なので小学生にも見えるその姿は、俺の妹ながら妹は良く出来た美少女だと思う。

褐色な髪の毛に雪のような肌。つややかな肌からは妹の香り（ローズに近い香りなんだよな。）

琴音の細い腕が前に出て、俺は鞆を預ける。それが何時もの日課であり、俺の癒しで有り、俺の癒しである。（ここ注目！二回…いったよな？重要だからだぜ？）

「隼くん、じゃああん♪今日はオムライスだってえ〜！」

無邪氣過ぎる笑顔が俺に向けられる。毎度この瞬間はキュン死に直然だ。誰が見ても俺と妹の血が繋がってないのは見当がつくだろう。血…鼻血出そうだぜ…オイ。

「……そうだ。はいコレ。琴音欲しがってたろ？」

鼻血は出せない…俺が…俺が、引かれてしまう…。ガンバレ！俺。琴音が欲しがっていたブレスレット。今学校で大流行してるとか言ってたから買ってきたのだが…。少し甘やかし過ぎか？

「隼くん！大好きい！」

そうやって見せる笑顔に俺は相当弱いと思う。甘やかしすぎだというのは承知の上なのだ。しかし笑顔を見ると如何しても止められないのが現状だ。



翌朝、学校にて

「隼人、今日渋谷行かなねえ？」

友達の広大からの誘いだった。…。確か琴音は出かけるって言うってたっけ。家に天使が居ないのであれば、俺が帰る必要性も無いのだ。

「今日はフリーだし大丈夫かな」

「って！お前は何時もフリーじゃねえのか？」

「・・・そーだな。」

俺は妹と比べ（血が繋がっていないから当たり前だが）凡人だ。コレといった特技も無ければ勉強も普通。因みに俺の辞書にモテ期と言う言葉は無い。

広大は何だかんだ言ってモテる。チョコを翌年も10個近く貰っていた。・・・いやそれ以上かもな。持てる癖に俺と何か連^つんでるから、つくづく持った得ないヤツだと思う。

・・・。

「別行動で。何かあったらメールなー。」

「ああ」

着いてからそのまま広大と別れ、適当にブラブラしていた。ソレだったら一緒に行く意味が無いと言うツツコミをどうかこらえて欲しい。俺は男ながら東京の街をブラブラするのが結構好きだ。ただ時間が過ぎるだけなのに一瞬一瞬が不思議と体に刻まれる。コレは妹以外の唯一の『癒し』だった。

急に喉が渴いたから建物の間にある、つい最近見つけた自販機へ向かう。人通りが少ない所。

そこで予想もしなかった人物に出会う事となった。

・・・あの後姿、琴音か？

琴音らしき人が建物と建物の中で縮こまっていた。

・・・何やってるんだ？

お尻を地面に付けない体育座り状態。短すぎるスカートからは、太ももがちらつかせていた。

・・・少しは用心しろよな。

お前みたいな美少女は東京で何かあるか分からねえのにな。妹は下を向いて何かをブツブツ言っている。

「おい・・・」

・・・琴音。そう言い掛けた時だった。

「グオオオオオ・・・」

竜巻のような風が一瞬にして起こり、俺の体は宙に舞った・・・はずだ。

そこからの記憶が無い俺には断言する事が出来ない。

？（？） 天使が舞い降りる（後書き）

俺はどうなるんだ！？

お気に入り登録して下さい☆
投稿がンばれます！

?(?) 異世界、そこにあり

気が付いた、のだが……。どうなっているのだ？俺の体が目の前にあった。つ、つまり魂と体が離脱した？

「……。わけねえか。」

一人でそう呟く事しか今の俺には出来なかった。そう、ここは真っ白な部屋。寧ろ透明^{むし}と言っても過言では無いだろう。『俺は何故此所にいるのか』そんな疑問を残しつつ記憶をたどる。然し覚えていたのは、妹を見て風が起こった、所で消えていた。

さて：俺はどうすれば良いのか。部屋を見渡すがハッキリ言って何も無い……。いや、空気はあるよ？そんなツツコミした低レベルなヤツはほっておこーかな？

気が付くと何故か金属で古い、大きな扉があった。わー不思議。じゃねーよ！？さっきまで本当になかったんだよ？普通に怖いから。

コレは行けて事だよな？そう思いながら扉を開けた。

「グギギギギギー」

怪しげな音がして扉が開く。俺は何処に居るんだ？

扉の中は霧がかかり中々見えない。周りの霧が薄っすら消えて何処に居るのか、かろうじて分かった。

……。森？

扉の向こう。それは森だった。寧ろジャングルだな。そう言えば俺ここで一度も人影見てないのだが、大丈夫なのだろうか結構余裕そうかもしれないが、俺の足、バッチリ震えているぜッ…。

「ガサガサ…。」

（ビクッ!!）

突然の物音にも超敏感な体。…チクショーツ、立っちまった。

何か嫌な予感がするーーーー

そして不運にもソレは当たってしまう事となる。虎の様な魔物が姿を現した。羽らしきモノが生えているのが気になるが、今はそんな事言ってる余裕は無い。恐らく…いや絶対この魔物は俺を狙っているだろう。口からヨダレ出てますよ？君。

「グオオオオ！」

コイツならパクッと一口だな、こりゃ。

「グラウド待ちなさい。」

そこに‘声’が聞こえた。聞き慣れた天使の声だ。

「琴音?…何で？」

そこには何故か琴音がいた。しかも何時もは可愛い服で皆（俺）を虜にしているのだが、一段と誰もが惚れちまう様な姿。

？（？）異世界、そこにあり（後書き）

どんな姿だよ！

?(?) 義妹の強しその姿

琴音の格好は俺のハートをわし掴みモンだった。上半身は水着ビキニの様。下は制服と同じ長さのスカート。ついでに腰には2本の剣も拵えていた。剣を構えていてこんなに可愛いのって凄げえな。

「隼くん……………何故？」

俺を見つけた琴音は酷く動揺していた。しかし直ぐに魔物の存在に気付き意識を集中させている。ノックオンしたら忽ち真剣な目付きになる。

「説明は後で聞く。隼くん下がってね、とりあえずヤツちやう！」

今までに見た事無い彼女の勇敢さに俺はビビっていた。妹は正直何時も天然なのかと思っていたからだ。魔物はターゲットを俺から琴音へと変えたようだ。

… 琴音が剣を抜いた。そして剣から光りが射す。彼女はその光が集められる様に身に纏った。

「しえるだぁ！」

可愛らしい声と共に凄い音がして、妹はその音の共に動き出す。同時に魔物も妹に向かう。共に走ってすれ違う、一瞬の出来事。

両者触れていない。… と思ったのだが、魔物は倒れた。一体2秒の間に何があったんだ…? 俺には彼女達の動きが見えなかった。

「え……?」

俺の目では到底何が発生したのか分からなかった。

「見えない空間のエネルギー（波動）が宿ってるの、コノ剣には。」

波動……とか何だか知らんが剣と魔物は当たっていない。どうやって倒したんだ?

「……でも魔物に触れていなかっただろ?」

「だあかあら! 剣先で切ってないの。剣の波動（剣の見えない波の様なモノ）でやったから触れていないの。剣先の刃物で切るのは古い考えだよ?」

どういう事だ? 剣の刃先では切っていない……。波動で?

「魔法……」

「そうそう! 魔法に近いカモ。」

呟いただけなのに琴音は聞き逃さなかったようだ。

要するにこう言う事らしい。刃先では切ってないらしく、波動で倒したらしい。そして波動は魔法の一部だそうだ。

結構すんなり受け止めちゃっているが、俺はスツカリ重要点を忘れていた。琴音のせいでココに来たのは間違い無いだろう。

「琴音、俺は何故此所にいるんだ?」

「うゝん。教えて欲しかったらあ、どうしよっかなあ?」

来た．．． 琴音小悪魔モード！天然一筋のはずな琴音が急に小悪魔系女子に変わる、そのギャップで惚れさせる事の出来ない男子など居ないだろう。それくらい超絶可愛いのださッ！

?(?)義妹の強しその姿(後書き)

次回！主人公が何故此所に来たのか証される(かも)

?(?) 小悪魔的美少女

「うーんとお、じゃあぁ〜」

小悪魔モード全開の琴音。琴音は二重人格で一つは天然でもう一つは小悪魔系だ。足して2で割ったら丁度なのだがな!!

「魔法少女になってくれたらいいよ?」

小悪魔モードの琴音は時々可笑しな発言をするんだ。

「もう一回言ってくれるか?」

「魔法少女になってくれたらいいよ?」

二回聞いたから間違っていない。や...やはり俺の耳は狂っていないようだ。少女? しょ...少女? しょ...

皆に聞こう。急に可愛い妹に『魔法少女になってくれ』と言われた。どうするか?

「しょ... しょ...少女って?」

「少女。」

勿論琴音も冗談半分で言っている感じではない。即ち本気なのだ。真顔で言われても(汗)

「俺男何ですけど。」

「普通に性転換すれば...」

性転換とかノリで言わないで欲しい…な。冗談だと信じている…兄ちゃん、信じてるからな…。

「……………なぜに少女にこだわるんだ？」

「この王国の神が勇者やその守護者は古来から女と決めているから。男なら性転換しろって言うのが掟なんだよね。」

「そ…そうか。」

この時点で『少女』っていうワードは解決…出来るかボケ！
！そんな性転換する必要性を感じない。俺は女になりたくない訳でもないが、…でもヤダよな。

「そ…そうか。」

勿論そんな事は言える訳が無いのだが。

「何で俺はソンなモノにならないといけないんだ？とっとと帰りたい。」

「それは無理だよ。ココに居るって事は選ばれたんだよ？もう決定なの。」

『剣士』はそれに使えるパートナーが必要で、隼くんがそれに選ばれたって訳。」

剣士とは恐らく妹の事だろう。

「何で…魔法少女が必要な…？」

「剣士の剣と魔法って意外にもの凄く大きく影響しているの。…さ

つき言った様に、波動を操るには魔法少女が必要……ってかあった方が良いみたい。いた方が強い剣士になるんだって。」

即ち俺は妹のパートナーになるために呼ばれたって言う訳か。
俺は別に嫌な気がしなかった。

…急に眠気が襲ってきた……。

それからその先……記憶に無い。

?(?) 転生のち変身

んんっ？柔らかいッ…そして良い香りと柔らかい感触が肌に当たる…しかし、体が重たくなった気がする。胸の上には何かが乗っている…そんな気がした。

…って！！！！！

ガバツと目覚めた時には、俺が俺じゃなかった。柔らかい肌、でかいを通り超した爆乳、そして、良いにおいがする。

…じゃあ、ま・ま…まさか、俺の大事なア、ア…アレは…！！？

不運にも予想通り俺の大事な所は消えていた。切られた後も無く、俺は転生したのか？女…に？女、女…女になっている…！？
小さい部屋の空間の中をぐるりと見渡すと気になる物を発見する。
シンプルな部屋に似付かわしくない、超ファンシーな物体。…ピンクの杖だ。女の子が好きそうなヤツ。気が付くとその杖を握り、振っていた…

「みらくるう〜〜チェンジ☆」

ウェッ！！！！なんじゃ今のは？？？無意識に言ってる自分が怖いぞ、

オイ！その瞬間、体がふわりと浮き、全裸になりつつ光に包まれる。
（お約束通り、周りから見ても多分光で見えないよ♪）ベットの
上で、ピチピチのミニスカをはいた少女1人。…勿論俺だ。

……自分が言ってる事もやってる事も理解出来ず、ただ立ちつくし
ている自分。

「かんりよ～～お☆」

……ハハ。セリフも動きも自動的にやってくれるッてどうよ？便利
じゃね？

「隼くん、起きた？」

MYエンジェル琴音の声だああ～～～～！！俺を癒してくれえええ
ええええええー。琴音、琴音、ことねーッ。I LOVE琴音ー
ッ、俺の女神様ああ…

琴音は、コスプレ！？どっかの戦士みたいな勇者みたいなコスプレ
ッ。可愛いのおお（デレデレッ）

「可愛い～～ッ。やっぱりお兄ちゃん最高すぎるッ！！！」

女姿を褒められても全然嬉しくねえ…！！どうせなら転生前に褒め
られたかったわー…。

「変身もしてんじゃん！じゃー行こうかッ！！！！！」

そう言って強引に引っ張られる。幸せ……妹限定のMなのさーッ！

？
(?) 転生のち変身(後書き)

途中から暴走します(笑)

?(?)獅子と羊

家を出ると此所は町で有り、すぐそこが市場であることが分かった。どうやらこの世界では魔法を使用出来る者も居るみたい。

：先ほどからメチャクチャ痛い視線を感じるのだが……。矢張り格^{へん}好^{しん}がミニスカでピンクだからかな？

「君は何処から来たんだい？」

薔薇を口に銜えてる：凄く古典的なヤツが話しかけてきた。：ああそうか。今は美少女になったらしいな。

どうりで嬉しくない視線な訳だ。だってそうだろ？男に見られて嬉しい男がいた方がキモイと思うわ：。

「ロイ、この子は記憶を無くしているの。ちょっとそつとしってあげて。」

妹が上手くごまかしてくれた。ナイスッ琴音！だが：琴音よりも可愛い設定なのか？

どんなけ可愛いんだよ、今の自分：。

「今のヤツはロイ・マルグス。町一番の女好きでモテ男ランク10位には入るらしいわよ。私には良い所がさっぱりわかんないケドねッ。」

でも、ロイとか言うヤツは確かに格好良かったと思う。少なくとも転生前の俺自身よりは。（そんなモノ比べようが無いのだが：）

「あれは何だ…?」

そう言ってデカ過ぎる建物に向かって指を指す。

「あれは今から行く所。まー行けば分かるッ! いくよおお!!」

：妹よ、異世界に来てからキャラ変している気がするのは俺だけか?
? こんなキャラじゃなかったよねッ!? 妹なら何しても可愛いがッ
ッ!



「やつほお、お久しぶりでえーす!」

「あッ! マリアちゃん、久しぶり〜ッ!」

妹に向かって「マリアちゃん」と呼ぶ声が妙に気になる。こっちの名前だろうか?

「あッ、こっちではマリアって呼ばれてるからー。琴音でも別に良いけど…」

「マリアちゃんッ、その子は??」

ここでも男が寄ってくる事寄ってくる事……。その芽が何か怖いワッボケ! 荒い鼻息が聞こえて来そうな勢い。獅子に狙われた羊になってもなった気分。

「この子、新入りなのさ。可愛いだろお〜ッ! シオンって言うから。」

「シオンちゃんツ宜しくねッ」

俺はシオンと言う名前の事になった。ってかされた。男にハーレムされても嬉しくないんじゃないじゃボケ!! おほんッ口が悪くてすみませぬ。

「俺とチーム組まない?」 「俺ッ」 「僕と…」

「あッ、ごつめーん。もうマリアが組んでるから無理なのッ。」

「ええー」

俺の知らない所で勝手に話が進んでいくが、全く理解出来ない…。

「じゃッハイこれ。それを胸に押し当ててッ。」

そう言って渡されたのは、鍵の様な物体。変なマークが刻まれている。

「こうか…?」

その瞬間、鍵の様な物体は心臓の方に飲み込まれ、消滅していた。

「ようこそシオン、我がギルドへ!!!」

?(?)ギルドへ!

どうやら此所の無駄に度デカイ建物の正体は『ギルド』ならしい。冒険とか、そう言うベタな感じになる気配がプンプンするわ…。

「さっきの心臓に入れた鍵は、”クォティカル”と言って、そのギルドに居る事を示すと共に……。

まあー他にも色々あるんだけど、また今度教えてあげる。」

明らか面倒になって省略したよな?…でもあの変なマークはギルドマークなのか…
センスねえな、あのマーク作った人。

「あのマーク、実は(琴音)マリアが作ったんだよッ!凄いでしょ!?!」

「へ…へえー……ッ」

お…お前かよッ!センス無いの!!(ロリコン野郎でも、さすがにこらえられなかったツツコミ…)

「そうだなー」「マリアのセンスの良さは認めるわ。」

…オイ!この世界の奴らよッ…!今絶対否定するトコだったからッ…。…どうやらこっちの世界はセンスやらが随分違うようだ。…そういうー俺此所にこんなな馴染んでいいーのかな?

背後からの声に振り向く。

「お・お姉サマッ、僕を置いて行くななんて酷いですッ…」

そう言っ出てきたのは小さい美少女。メイド服着用の弄りたいタイプ…。ロリ野郎大好きなコシュ！ウルウルした瞳が超絶可愛いなあ…。『にゃん』とか言いそー…ッてか猫耳メイドさせてえ感じ！
！（どんな感じだよ！？）

「あゝ私の下僕ちゃんアイドルのアルマだよん。超絶可愛いでしょ？隼…じゃなくてシオンなら勝手に使っいいいよ？」

げ…下僕って…。妹にはどうやら美少女な下僕が居るらしい。って言うよりも、妹は美少女好きか？いつから女王様きやらになっちゃったんだッ！？

「お姉サマッ、僕は弟子ですう…。下僕じゃ…」

「この子もチームに入れる事にしたからッ。アルマ、シオンの言う事もしっかり聞くのよ？そしてご奉公するのッ。OK？返事しない子は嫌いよ？」

「…ハイ…ッ。」

どんどん俺の中の妹予想図が崩れてきている…。アルマは何か言いたげだが逆らうこと無く、下を向いてしまった。

「詳しい事説明して無かったわよね？取りあえず説明しとくわ。まず、この世界で魔法は欠かせないモノで魔法を使って依頼をクリアしていくのお。」

そして攻魔者と支魔者がいんだけど、ペアでチームを組むのが一般的で、支魔者は（支える）だから、その名の通り攻魔者を支えるのが役目よ。

支魔法は主に『外魔法陣』を利用するんだけど、その力を受け継ぎ攻魔法者は攻撃するの。それを簡単に言うとな力を作るのは支魔者で、それを当てるのが攻魔者っていうわけ。：貴方は支魔法者で杖を使う練習をすればいいわ。」

力説をしている妹の姿は生き生きしていた。ここの異世界で戦うのが相当楽しいのであろう。口調が変わっているのが妙に引かかるが…もういいや！

「じゃ、魔法レッスンは明日からねッ」

いきなり後ろから喋りかけられる。すごい美人だ。しかも巨乳…。

「あッ、マリーさん！居たんですかッ？」

「傷つくわね…ずうーつと後ろに居ましたよお。ソレよりも、この子可愛いッ！」

そういつて俺をムギユツとした。

「巨…あ…ブ…ッ！」（巨乳があたる…べたにも鼻血）

「私はこのギルドのリーダーのマリーよッ宜しくうねん。」

マリーさんが自己紹介をしてる中、俺は意識不明状態。

……こうして、俺の異世界一日目は幕を閉じた……

?(?)ギルドへ!(後書き)

無駄にきやら出てきた&ごちゃごちゃしてて意味不な巻デシタ!

?(?) 魔法を学ぼうッ

2日目、異世界のとある村にて――

「ぐ・ぐうえええええー！ーえええー！！」

ー異世界は朝から騒がしいのらー…。

鶏(?)のような異様な声が朝7時から一斉に鳴き始める。外に出ると馬のような生命体が騒がしく鳴いている。…目覚まし時計百個分ぐらい。…って、うるせー！ーよッ！！

この世界の住民はその声で目を覚ますから、寧ろ有難いらしい…。

朝ボウツと顔を洗いながら、自分が女だった事を鏡を見て思い出す。…可愛いなーっこの顔。転生した後顔がラブリーなのは、男でも地味に嬉しかったりする。まあ、そんな訳でギルドへ向かうー

「やっほうー」

此所は本当にほのぼのしてんなッ。まッ、この後ほのぼの一切無しのがち無理状況になるなんて思っても見なかったがなッ！(因みに後日談だ…。)遠くからロイが此方へ向かって来ているっぼい。ーコレは…口説かれる…。口説かれるぞッ？オイ！！

「シオンちゃんッ、僕が魔法を教えてあげ…」

「結構です」

やっぱり口説きにきたか……。まーロイみたいなクソ薔薇野郎にはバツサリ言う方が効くんだな、これが。俺は女の子にしか教えて貰わん！（君…自己中じゃないですか？）

ほっとけ！女の子沢山出てるんだからラブイベント起こしてくれよ！（貴方が女の子だって設定を崩すつもりは一切ありません！）

ケチ！いいじゃねえかよ！せめてマリーさんと位…（ないですッ！）

○●ただ今作者の妄想入りましたっ、ハイ、スママセン…。●○

「二応シオンちゃんの魔力調べたいし、取りあえずテストするわあ」
「いつの間にやらマリーさん登場。今日も大きいお胸で…」

「いっくわよ」

そうして連れてこられた所が…崖の上デシタ…。

『~~~~ぽーによぽーによぽによ魚の子♪青い海から…』

……じゃなくて！！確かに下は青い海ですけど！この崖のした！
！じゃなくてッ！！

「はいっ」

「こ…コレは何ですか？…」

「ほうき。」

…ま・ま・まさか、コレでと…飛べと？無理だあああー！魔法？そんなモン知らねえよ！ほうきで飛ぶとか無望な事言うんじやねえ！！俺は後ろを向いて走った。ガチ全速力で。
しかしー魔法の力にただの人間の力なんか勝てる訳が無かったようだ。

●…●…●…●

「逃げるのが悪いよねッ」

「ちゃんとやってくれたら止めたのにー。」

後ろで何か言ってるマリーさんと妹、…アルマちゃん（は無言で。）逃げられない様にほうきに跨り鎖で繋がれた俺の両手。可愛い天使に見えた妹も今は悪魔にしか見えません（泣）。神様ッ俺の大事な琴音を返り手ください！！それに純粹に冒険的ストーリーにしてくれれば良かったのに…どっから俺が崖から飛び降りるドキュメンタリーになったんだっ…

「あー、カウントいきます。10・3・2…」

何！？10から3に飛ぶのかよ！心の準備が…それに、言い方軽いなオイッ！！

「1…いっけえええ！」

後ろから蹴られ（まさかの荒技に驚くわ！）そのまま綺麗に落下ー
ー
ー
ー

ー
ー
ー
ー

?(?) 魔法を学ぼうッ (後書き)

ここで主人公が死んでまさかの小説終了か!?
どうなるのかッ!?

それよりも、いつからギャグ思考になったのだ? 私!

？（？）世界の狭間、白い世界。

『隼^{シオン}…お聞きなさい。――――』

意識が覚醒すると周りの様子が段々理解出来た、見覚えのある部屋に驚愕。何処かで来たような真っ白な部屋は、異世界に飛ぶ前に見たモノと同じ気がした。そしてふと、女が前に立っている事に気が付いた。それより…。俺死んだのだろうか？多分死んだな、コレは。

「お聞きなさい。」

目の前には偉い美人様は今まで見た中で多分断トツ一番かもしれない。。そう言えなさ…この世界、美女ばかり出るのはよろしい（何様か。）と思うが、ラブな雰囲気にはならねえな…くそ作者めッ！！（クソ主人公に言われたくねえな！！）＊今回も変なやりとりマジでスミマセン。＊

『貴方に伝えるべき事が有ります』

「な…何だ…？」

myワールド（つまり俺の妄想内）に入り込んでたし…。

『貴方は…死にました。』

「……は？」

『つまり、ゲームオーバーです。』

し…死？死んだ？シンダ…。俺、崖で死んだんだ…。…は。

『ただ』

「ただ？」

「異世界は壊滅の危機に陥っているのをご存じですか？」

「壊滅？」

「はい。異世界に災いが起き、壊滅してしまうかもしれないのです。

」

「……」

あの平和な国が、壊滅してしまうの……？ そんなの……いやだ！ それより、内容にまだ深入りしてないのに

終わっちゃう感じで大丈夫なのか？ まだ本編入ってないぞ！（マジで）戦闘シーン書けなかったじゃねえか！！ クソ、目的達成ならずかよ！ オイ！

「……しもうがないですね。そこまで言うなら貴方にチャンスを与えましょう。いや、異世界を救って下さい……」

白い世界は渦を巻いて黒くなっていった……

?(?)世界の狭間、白い世界。(後書き)

つまらん小説でスミマセン(泣)

直して欲しい所、ずばずば教えてくれる方募集！
毒づく感じでOKです！寧ろ有りがたい！

一章完結、お礼

ここまで呼んでくれた心の広い、もしくは暇野郎様。どうも有り難うございます！

ここまでで一章完結です。魔法系全く出ていませんが、これから出ます…(Maybe)

ハーレムって程ハーレムでも無いし、面白くないし……読み返したら自分で「つまんねえ」とか言いながら読みました(苦笑) そんな事言いつつ2章やります(…なんでだろう?)

理由は簡単です。書きたいから。そう、書きたいから……まーいいや。

因みに2章はバトル系にしようかなツとか軽い気持ちで考えています。

ユルい感じで読んで頂けたら有りがたいです…。

ー♪もう一度おさらい♪ー

・シオン隼主人公。中身男の美少女

・マリア琴音可愛い隼人妹

・ロイ ただの女好き

・アルマ アリアの弟子。ロリ

・マリー 美女。ギルドリーダー。熟女設定で一応、ハイ。

でわでわぁー！。2章の方も宜しく願いしますー！ー！

？（？）まさかの俺最強

『隼^{シオン}…！目を覚まして…！』

遠くの方で俺を呼ぶ声が聞こえて木霊する。意識は朦朧とした中でも一応有るが、体は金縛りに遭った様に動かない。不思議と遠かったその声は段々近づいてくる気がする――

「隼ッ…！」

俺は泣きじゃくる声にはっと目を覚まし、すぐ側で皆が泣いている事に気付いた。

「し…シオーーーン…！！！」

皆が俺に抱きつく。皆本気で心配してくれたようだ。俺はソレが凄く嬉しかった。女子は良しとして…ロイ、お前は離れてくれっ！キモイから、マジ。

「心配させないでよッ！私の責任になるかと思って心配してたんだから！」

ま・マリーさんの心配所、そこですか…。しかし女子とは何故こんなに甘い臭いなのだろう。それぞれ特有の甘いにおいが俺の鼻の中に刻まれる。

「じゃー魔法レッスンいくよ？」

「休ませてくれねえのかよ…！」

俺死にかけたんだぜ？異世界じゃなかったら死んでますよ？俺。異世界は結構なんでも有りなんですよね。

「じゃあ、簡単なヤツからね。」

マリーさんは基本的に思いついたら止まらない。俺には止めることが出きそうに無い。

○…○…●…●…○…○

「火を造作して、それで攻撃する一番簡単な魔法からいこうかしら？因みに魔法はランク別にされていて、この魔法はFの最低ランク。一応F E C B A Sの順に形成されていて、私やマリアはS使えるけどこのギルドでもSランク魔法を使えるのはごくわずかなの。……そーね。火を作りるイメージで念じなさい！」

火を作る…か。俺は自分の思った通りに火を念じる。
すると、俺の手の平から青白い光が形成される。

「…！？」

周りは騒がしかったのに、それと共に静まりかえった。ギルド内が沈黙になるのは本当に珍しいのだ。そして、皆俺を見ている気がする。驚く様にマリーさんも俺を見ていた。

青白い光は瞬く間に大きくなり、やがては渦を巻く。…のだが、すぐに消えてしまった。

「……貴方には才能が有りそうね…」

ぽつりツとマリーさんは言った。

「お前…」

「まじかよ…」

まだキャラとしては出ていない脇役共がヒソヒソ話している。今の…そんなに凄えのか？

「^{シオン}隼、よく聞きなさい。今の…光はランクSの最強魔法。『正式名 Satan Seal』と言って皆知っている魔法なの…。」

「そうなのか…。」

そんな事言われても…何ソレ。俺最強って事？

?(?) 悪魔と魔法、

――この世界、地球からみて異世界は神が作り出した物……では無く、天国から追放された悪魔が作りだしました。

悪魔は自分の思い通りになる所謂いわゆる思い通りの世界を作ろうとしました。そして悪魔は始めに星を作り、その後には自分の奴隷を作り町を作り、地を作り海を作り、ついには自分の思い通りになる原子体を集めた生物を作りました。

その生命体は悪魔に誘導され、人形のような物だったのですが、悪魔は動かすのが面倒になり、それで生命体に心を与えました。

始めは生命体も一生懸命働いたのにも関わらず悪魔は次第に自己中心的になり、生命体の中でも不満を持つ者が出てきたのです。

一方その頃、悪魔は第二の星を作りました。そこにも生命体を生ませました。因みにそこが今の地球です。悪魔は生命体達が不満を持っている事も知らなかったのです。

そして、生命体は魔法を生み出しました。いえ、悪魔を見て独学で覚えたと言って良いでしょう。悪魔の持っていた書を勝手に持ち出して夜な夜な勉強に明け暮れました。

そして真夜中。生命体は悪魔の所に一斉に向かいに行きました。
しかし何も知らない悪魔はぐっすり眠っています。しかし悪魔は目
を覚ましてしまい、次々と悪魔の攻撃により生命体はやられてしま
います。

そのまま激戦になります。千…一万ほどの生命体を相手に悪魔は戦
います。

しかし、悪魔には魔力が無いに等しい状況でした。自分の魔力を異
世界作りの為に削って作っていたのです。悪魔は意識朦朧とした中、
必死に戦いました。

生命体の数が百に近くなりました。生命体はどんどん消えて泡とな
ります。生命体は非常に脆く作られていた為、悪魔の攻撃にどんど
んやられます。

そこで、辺りが光りました。生命体の一揆を見て心が奪われた神は、
一時的に生命体に力を授けたのです。

生命体全てが一斉に魔法を使い、中心部に青白い渦が出来たのです。

大きくなったその渦に吸い込まれ、悪魔は封印されてしまいました。

生命体はその後自分達で異世界を復興させました。その魔法の事は祖先から、長く受け継がれているのです。

？（？） 悪魔と魔法、（後書き）

昔話（笑）

？（？）あの人が来るといふ噂（前書き）

放置してたし（笑

？（？）あの人が来るといふ噂

『Satan Seal』やらという伝説（？）の魔法を使えかけた事をきっかけに、俺は何故か有名になっていったが……超迷惑なんですけど！！確かに、認められたのは嬉しいけどさ、その後町で――

「伝説の姫ちゃんじゃないか？ほら、あの人……、あそこあそこ！」
「本当だ、噂通り美人だし、凄い可愛くないか!？」

「ひょえー、あそこのギルドは可愛い娘ばかりだけど、一際目立ってるなあ」

あだ名は姫様……と呼ばれている。何でだろうな？只でさえ可愛い転生後の自分の体（俺自身ではないから）にファン急上昇中だ。勿論ソレに紛れて触ろうとする♂共もいるがな！キモイキモイ……。転生して男が醜くみえてしょうがない……自分も含めて。男な時点でそれは、もうしょうがない！うん。

「あつらら！ファン増えてずるーいッッ、まあ本当に可愛いしね。
よッ、うちのギルドの看板娘！」

マリーさん、本気でだだをこねられても困りますから。

「本当は……俺は男なんです」……なんて、死んでも言えないわ、ボケッ

「看板娘は絶対マリーさん、もしくはマリアじゃないと出来ない」と

思いますよ。」

「あらあら、フフツツ…私は娘を後ろに付けられないからッ。看板
熟女ならいけるかもお」

はは、「看板」に否定しないのもマリーさんらしいと思う。しかも、なにげに喜んでるし……。

「マリーちゃん〜！会いたかったー、会いたかった、会いたかった〜」

「会いたかった」を只ひたすら連呼している、キモイおっサンの声。何だろうと思いつつ後ろを振り向くとハゲ頭のじいさんがいた。「エロ親父」って聞いて妄想したまんまの親父ですよ……これは。

「ありやりや？この子は姫ちゃまああああ。お目にかかれて光栄でござんしょう！！」

……俺はこの時点でハゲ仙人の事はドン引きだ。ハゲキャラだけでキミは間に合っていますからね？そんな特殊なキャラ設定要らないですから……。

「あ！クソさーん！」

く…クソさん？マリーさんがそう言って指を指したので、恐る恐る見てみる。クソって…（苦笑）

「ありやりやりや！マリアちゃま、お久しぶりですね。元気でした？」

「うん！クソさんもお元気で？」

「ハイ〜〜、私は元気ですよ！見ての通りですッ」

カマをかけてみたがやはりそうみたいだ。クソさんⅡハゲ仙人。

よく見ると、色々突っ込むポイントが有る仙人であった。格好が蝶ネクタイ（ピンク）に黄色いスーツで何故かペアのズボン&帽子。

要するに大阪とかの売れない漫才師かってツッコミたくなるような格好。こんな服こっちの世界にもあったんだな（苦笑）

「ありゃ」とかうるせえな。関西人かッ！関西人の方スママセン。俺も関西人です、ハイ。

クソ…か。何か見た目と一致…↑（殴）いや何でも無い。

「クソさんは、どういう役職で？」

「なぬ！わ・わ・わ…わしを…し・し・し・知らないのかね？」

ここに来て一番のナルシスト登場かもしれない。アイツ（俺につきまとう男）は断トツで2位だけど。今日はヤケに関西人パワーみなぎっているのかツッコミに磨きがかかっている…いや、ただツッコミ所が多すぎるだけなのかもしれないがな。

このヒステリック仙人は5秒ほどで立ち直る。

「しょうがない。知らないならば紹介しちゃいましょう！この人は隣町ギルドのギルド長さま、です！」

なにげに威張っている仙人を無視して考え事。そういえばさ、このギルドにギルド長居ないなって思わないか？マリーさんは一応リーダーっていったしな。

っていうよりも、このギルド人数多い癖に脇役（名前無し）の人多くないか？出てもその他大勢的なノリじゃん？出してあげようよ。

【あ…良いところに気付いたな？隼シオンの癖に生意気だな。でも、まあいい。出してやろう】

男いらねえから美女だ！美女。マジ可愛いの出してくれよッッ。

【お前の行動次第でな。面白い小説にしようとしてくれればいいよ？ただでさえこの小説面白くないんだから。ネタ切れしてるし、もう消去しようと思ってるんだから。】

そうなの？

【うん。嘘じゃないからね。】

俺的に消して欲しい。男に戻るにはそれが最前の手段だと思うから。

【そうか、じゃあ最後、主人公は死んだって事で終わろうかな？】

……………ゴメンナサイ。

……ハイスミマセン。戻ります。MYワールド↑（殴

「此所のギルドのリーダーって誰なんだ？」

「あー、形的には私になってるけど、一応正式のも居るわよ。世

界一周旅行かなんかに出て2年ぐらい居ないわ。あのクソわ。」

マリーさんと仲悪いのかな？マリーさんの機嫌も悪くなったしこの話は中断させておこうか。俺もちゃんと頭使ってるんだぜ、こんな単細胞頭でも…な。いま笑ったヤツ、お前の方がよっぽど単細胞だって言いたいわ、ボケ！

って俺なんか段々捻^{ひね}くれてきている気がする。純粹な心に戻ろうっ
(殴)

「クソさん、ご用件は？」

「実は、ここのギルド長が帰ってくるらしいんですよ。多分〳〵、明日頃には。」

『えッ！？嘘…。』

ハモって、その返答は風と消えた。

？（？）あの人が来るといふ噂（後書き）

妄想ワールド長いのお。実はこの小説一時期書くの止めたんです（笑）

面白くないし。でも、一応お気に入り増えてるし：地味に。（泣）

結局書いてますが、気が付いたら消えてるかも（笑）

すみません。

こんにちわ。作者です

えと……何故かこんなへぼい小説なのに、観覧してくれている人がいるのです。

めっさ嬉しいのですが。

こんなしょぼい作品をお出ししてもいいのか？本気でそう思います。ここまで来てくれた方には感謝してもしきれないですね。

一方、小説の方ですが…。

なにげに妹消えてるし…（笑）マリーさん妙に出しゃばりだし。こんななので、一週間ほどじっくり考える事にします。

へぼいのに毛が生える程度でしょうが。楽しんで欲しいので。宜しく願います。そして、勝手にすみません。

では、また一週間後。（異世界の美少女っていうの始めました☆）

あと、新作（異世界の美少女）始めました。また同じノリですが見てね☆

感想くれる人いないですか？

？（？）あの人が来ると言う噂2（前書き）

あの人登場なるか？

?(?)あの人が来ると言う噂2

ギルド長がマリーさん化した今、出てきても虚しく一方なのでは無いか？誰にも必要とされていない可哀想なギルド長でもどんな人かは気になるのだ。

「マリーさん、そのギルド長はどんな人なんですか？」

「会ったら分かる。それよりあんたのそのデカイ乳を守る絶守魔法覚えておいた方が良いわよ？取られる揉まれる触られるー！言っただわよ？もう先に忠告したからねッ？絶対よ？絶対」

「絶守魔法」ってのは自分の身を守る拳法的魔法の事だ。……今マリーさんがヒステリックになりそうってッ事はやっぱりギルド長に触られたのであろう、彼女は。俺は一応中身は男だし、触られても問題は全く無い！体触られても、どんと来いだっ。いやいや、そう言うわけにはいかないか……。

それよりさ……女好きキャラは此所のギルド、ロイだけで十分な足りているんだがな。女好きより女増やせっ、この野郎！

「シオン……、今俺の事を呼んだかい？」

「いや、気のせいだろ。」

ロイが気持ちが良いのかよ、ってタイミングで来たからビビる。ロイの感の鋭さだけは褒め称えてやろうか。何故か上から視線

「と言うよりも……、シオンさんは絶対あの人の餌食でしょうね……。」

コウが言った。…初めましてか？このギルドのモテ男一位はと聞かれたら、名前が一番拳がる人。

このギルドで一番常識人で有りまともな人。モデルなんかの仕事も来ているらしいが、一切お断りをしているみたいだ。でも俺にはむつつりスケベにしか見えないのだ。

今俺の胸がん見ですから。彼の瞳には俺の乳しか映っていないようだな。男って硬派に見える方が案外ムツリだったりする。それを女子達はまだ知らないのだな、本当に。

「おいマリー…速報だ。アイツが…、アイツが来たらしいぞ！もうこっちに向かっているんだと。多分もう帰ってくる！！」

「うげッ……」

「やだよ……」

「マジかよーッ！」

やたら絶えてるヤツが居るからギルド長がどんな人か楽しみだ。（…俺だけ本当、何でだろうな？）ギルド長の予想図は白ひげのじじいだ。所謂サンタ的ポジショ^{いわる}ンだろ？白ひげ…。そういえば、サンタと言えばクリスマスだがこの世界には「クリスマス」という習慣自体無いようだ。此所の子供達、ドンマイ！

ギルド長が来るのは、刻一刻と迫ってくる……。――。

？（？）あの人が来ると言う噂2（後書き）

なりませんでした。次回か？

？（？）圧倒的な力（前書き）

登場しますよ。

?(?) 圧倒的な力

皆がもうすぐ来る事を知り、そわそわしたり、魔法を唱えたり…。やっている事は違うけど自分なりに身を守る為の策なんだとか。

俺は……絶対守魔法なんて使えなねえーしなあ。突然言われても、無理無理。

「シオンは絶対守護だよ。私が守るから。」

マリーさんがグツと指を突き出した。何か頼もしいなーッ……どんな人なんだろう？ギルド長なのに帰ってくる時歓迎よりも防御を優先しなければならぬというね…、どんなに触るの好きなんだ？

俺の中にはエロ親父みたいな人しか出てこない。

ーと。

「カツッ、カツ…」

「来たわよ、来たわよ。多分……、皆！まだ早いわ。魔法はもう少しー」

「あつろっはあゝゝ」

「げっ。」

今1秒でおうってなって、わってなって、げってなって…。（殴。
意味不明

何か凄い（これで綺麗にまとめた主人公は思っているようだ。）

しかしー。

入ってきたのは…どう見ても「女」。白肌の美人だ。格好は南国からきたのか北極から来たのか、アロハシャツに手袋マフラー。おかしいおかしい。

折角の美人が台無しな気がする。

でも…。あんなけ言っておいて、騒いでおいて、このオチかー…。

「シオン、気を抜かない方がいいわよ。」

「えッ？」

そう言った時、彼女のスイッチは壊れた。

「マリーまた胸でなくなっちゃってーっ。ほらほら…。（ボインボイン）↑『マリーさんの胸が動く効果音。』でも肌すべすべで羨ましいわ…。マリーでも下半身も太くなっちゃったんじゃない？あっ、昔からかーそれは」

(ぶちっ)

マリーさんの何かが切れた。

「つてゝマリアは純粹に支援するわゝゝゝ。成長してない身長と……。ファイト☆」

(ぶちっ)

「あっ、新しいギルドの子！？可愛いけどさゝゝゝ尻軽って感じ？何だろうねえゝゝゝゝ」

(ぶちっ…てなる筈もなく…男だし。)

「あっシオンです。」

「は…はあ？」

名前言ったら睨まれた……。あっそうか、切れて欲しいのかな？

「ミージャだよ。彼女の名前は。アイツ馬鹿だからこういう形でしか戦闘とか挑めないんだよな。純粹に戦いたいから、わざと言ってるんだよ。こういう事。」

コウがこっそり教えてくれた。

ぞくぞくと女子の神経が切れる音がした。

でも：確か、マリーさんはギルド長の事をおそれていた気がする。
他の皆も彼女が帰ってくるのをおそれていた筈。

舞台はギルド前広場。

「とうりやあああああ！」

マリーさんが本気で戦うのを初めて見た気がする。

「鋼魔法剣の舞……」

必殺技を生み出そうとしているのだ。

「うおおおおお」

その剣から出た強力な必殺技は一瞬で出て行き、ミーじゃの体の前から全身を浴びる。

お…終わった…。この魔法を浴びて大丈夫なのだろうか？

……俺達は睡を思わず飲み込んでしまった。

ミージャは吹き飛ばされる事も無くその場所で同じ状態。顔はもの凄く挑発的は笑顔だ。

「あはッ。マリーそんなもんだっけえ〜？」

「んああ？」

マリーさんが手を抜いたのか？

いや：違う。マリーさんは多分さっきの一撃に本気を出していた筈だ。でも、それでもへたれ無いって事は……

『どんなけ強いんだよ……』

彼女は髪の乱れさえ無い。

「ミージャの絶守壁……。倍ぐらい強力になったわね……」

ぽつり……とマリーさんは呟いた。

「絶守壁？」

コウはそれに気づき、また対応してくれる。

「自分の体の前に壁を作って自分の身を最大限に守ることだよ。おそらくそれで身を守ったのだろう。ミージャの壁の強度はケタ違いだからな。」

「こっちの番。だねッ」

ミージャは嬉しそうに舌をペロツとすると、魔法を唱える

「絶・闇・光……」

唱えながら手と手の空間に丸い玉が出来る（ドラゴンボールのカメハメハーかよ。）

巨大化するのにかかった時間は役一秒。凄い早さだ。

「だぁ♪」

可愛い声で叫んだのに、それはマリーの体を通過するーのではなく、かする。今のは絶対わざと外したのだと思う。通過してたらマリーさん死んでただろうし。今の威力なら

「んじゃー今年も宜しく！」

「い・いやああああー！ー！！」

この後…、彼女の正体は残念過ぎる事を思い知らされる事となった。だれもが引つかからないか？あんなに防備して、皆が帰ってくるのをいやがった訳。

？（？）圧倒的な力（後書き）

区切ります☆

?(?) 圧倒的な力(2)

「つていうかさ、全然たいした事なかった〜。強いヤツ居ないの？」

ミージャは暇そうに大きな口であくびする。皆は（特にさっきのか女子が）かちんと来て、また争いそうな雰囲気。……女子、怖いから。マジで止めて下さい。

「ミージャはさ。う、た………・…やっぱ何も無い！」

皆がドキッとしたように苦笑いをする。何だ何だ？未だに状況が掴めていないのは、俺とミージャだけのようだ。

それ以外の様子がおかしい。あらかさまに逃げようとしている。

「えっ？何何〜？教えろッッ！」

「う・う…ううん！何にも…「アッそうだ！プレゼント持ってきたよ。」

マリアの言葉を遮るように言った。

「「ギクリ」」

何でだろう、皆の心の中が読めたよ？ 「ギクリ」 って聞こえる程デカく、それも一斉にね。

「もしかして、もしかしてだよ？ まさか、ナージャ作の？ 歌？ だったりしないよね？」

「うん、そのまさか。」

「「ギクリ」」

「んじゃあー、気合いを入れて……」

「「気合いを入れないで……」」

—
—
—
—
—
—
1時間後。

「うはあ、歌った歌った。」

「……」

屍が見える。目の前に。

リアルにあの世が見えそうです。助けてマイケル↑（殴）誰やねん。

一人でストレス発散した、屍祭りにしたの張本人は出て行った。

あーこの屍達、どうしょっかな。（自分も同じ状況だろう？）

「貴方達は馬鹿ね。始めから耳栓をすればいいものの。」

——————マリーさんの助言。先に欲しかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2507x/>

義妹は姫君剣者ッ！

2011年12月6日23時48分発行